

## 六地藏寺本『文鏡秘府論』の漢字音

石山 裕慈

一 はじめに

空海の撰述にかかる『文鏡秘府論』は、漢詩文の理論書として夙に知られている資料であり、小西甚一（一九四八・五一・五三）をはじめとして数多くの研究が行われてきている。とりわけ保延四（一一三八）年移点の「図書寮本」に関しては、柏谷嘉弘（一九六五 a・b）により漢字音についての研究が行われており、それによると、仮名音注・声点の双方が日本漢音の体系によく合致しているとされる。しかし、その一方で、現存する写本が少なくないにも関わらず、漢字音資料としての研究が行われているのはこの図書寮本に限られており、それ以外の本については複製本などが公刊されているものであっても十分な研究が行われていないのが現状である。

文鏡秘府論の写本の一つである「六地藏寺本」は、天

北の六巻がそろっている上に、記入されている仮名・声点の量が膨大であるという特徴がある。文鏡秘府論については、複数の本に同系統と見られる訓点が入入されていることなどがすでに指摘されている（月本雅幸（一九八〇）など）が、前述のように字音点の研究は手つかずであることから、本稿は、六地藏寺本文鏡秘府論に記入された字音点について、その性質を検討し、日本漢字音史上に位置づけることを試みるものである。

六地藏寺本文鏡秘府論については月本雅幸（一九八四）

による解説があり、それによると、書写年代は一六世紀前半であるが、鎌倉時代中期書写の「高野山宝寿院本」に酷似していると見られること、訓点は六地藏寺本書写の段階で新たに創始された形跡が見られないこと、などが指摘されている。実際、雁点の中には、形状が左右対称で文字間の中央に加えられるものが散見されるほか、一・二点に関しても、漢数字の「三」ではなく「三」が使われてい

る例がある(1)。また片仮名の字体にも古風なものが見られるなど、祖本の訓点を踏襲した形跡がある。

一方で、六地藏寺本には、祖本の内容・文脈を理解し、十分な吟味の上で書写が行われたというよりは、むしろ無批判ないし機械的に書写・模写されたのではないかと思われるふしがある。すなわち、後の考察でも問題になるところであるが、エ／エ、チ／テ、ウ／ラ／ヲなどの仮名字体の誤認例が相当数見受けられるほか、韻尾の「ウ」と「フ」の混同例もまま存する。また、訓点の密度が高い箇所では、漢字と傍訓とが対応していないという現象も発生しているほか、東卷二〇ウ・四行目と五行目に至っては、一旦天地を逆にして付訓した形跡があるなど、書写態度にはしばしば粗雑な面が見られ、資料としての信頼性を損なっている感も否めない。

しかし、記入されている仮名・声点の量が図書寮本を大きく上回っているほか、他本の内容を補充するような例が多いことは大きな魅力であり、漢字音研究の進展に資するところも小さくないと考えられる。以下、仮名と声点それぞれについて、六地藏寺本に現れた漢字音の検討を試みたい。なおこの資料は基本的に漢音読の資料であり、呉音形は偶発的に混入している程度であることから、本稿ではもっぱら漢音形について、考察を行うこととする。

## 二 仮名音注の検討

冒頭でも触れたように、六地藏寺本では他本を圧倒する字音点に加えられており、全体で仮名音注は約二一〇〇字五二〇〇例に及ぶ。同じ六卷の図書寮本に加えられた仮名音注が一二〇〇字一六〇〇例であることを考え合わせると、その多さが知られるのである。

本資料では a・u・o・u の開合が混乱していないなど、古い時代の姿をとどめていると考えられる面があるのだが、これらの字音点が具体的にいつ頃の姿を反映しているか、以下の各点の検討によって、時期の推定を試みる。

### 二一 m・n 韻尾の区別

漢字音の鼻音韻尾には  $\dot{m}$ ・ $\dot{n}$  があり、このうち  $\dot{m}$  と  $\dot{n}$  に関しては、古くは「 $\dot{m}$ 」「 $\dot{n}$ 」などの書き分けが行われていたが、院政末期〜鎌倉時代頃から乱れ始めたと思われる。しかし、六地藏寺本では以下のように使い分けの確度が高いことが指摘できる。

まず、「 $\dot{m}$ 」と表記すべき  $m$  韻尾に関して、原則通り「 $\dot{m}$ 」になっているのは、八〇字一七二例であるのに対し、「 $\dot{n}$ 」になっている例は、以下の一六字二三例にとどまっている(以下、仮名音注のみを問題にする場合に関しては、

声点は省略した。また、用例の所在については『六地藏寺善本叢刊第七卷・文鏡秘府論』（汲古書院、一九八四）により、「巻、ページ数―行数」の順で表示する。奄…地 106

4、音…西 255―3、男…地 148―6、眨…天 48―6、地 132―6、地 139―6、地 140―2、地 141―1、西 334―2、蔭…西 297―1（割り注内）、検…北 537―6、北 539―5、品…天 60―3、  
 験…北 511―3、斟…西 273―1、錦…西 297―1（割り注内）、飲…西 297―1（割り注内）、北 574―4、範…南 433―2、焰…南 474―4、監…北 578―5、簷…東 237―3、菌…東 217―1。

一方のn韻尾についても、原則どおり「ん」になつているのが三二四字七四八例であるのに対し、「ム」になつている例は、隠…西 333―1、南 460―5、南 472―3、翰…南 442―3、顔…南 476―2、銀…北 581―5、辛…南 442―3、但…北 574―4、班…南 425―6、翻…東 219―6、邯…天 46―2、鱸…地 171―1の一〇字一二例に過ぎない。

二―二 i ヨウ・eウの書き分け

古くは、鍾（・腫・用）韻、蒸（・拯・証）韻には「i ヨウ」形、蕭（・篠・嘯）韻、宵（・小・笑）韻には「eウ」形が使われ、両者が区別されていたのに対し、鎌倉時代には混乱が生じつつあったとされるが（沼本克明（一九八六）など参照）、六地藏寺本文鏡秘府論では正確に書き分

けられており、「i ヨウ」と「eウ」の混乱した例は見られない。以下に若干例を掲げる。

①鍾（・腫・用）韻  
 鍾…天 60―1、天 73―5、地 102―2、西 362―5、縦…天 38―2、天 66―2、地 161―5、西 359―4、南 387―6、南 391―2、南 408―1、腫…南 431―5、冢…西 366―4、寵…地 95―6、地 151―3、地 161―3、地 163―4、誦…南 478―5 など。

②蒸（・拯・証）韻  
 蒸…天 29―5、西 253―2、西 297―5、西 315―1、矜…地 95―6、凝…天 35―4、承…天 29―4、地 100―6、剩…南 421―4 など。

③蕭（・篠・嘯）韻  
 曉…天 41―5、東 215―4、凋…天 24―3、地 160―2、貂…北 577―2、雕…天 56―2、天 58―2、地 164―3、窈…地 175―1、東 221―6、西 293―6、西 299―1、曉…南 405―6、篠…東 228―1、東 228―1、嘯…地 166―2、地 178―1、料…天 60―2 など。

④宵（・小・笑）韻

昭<sup>シウ</sup>：南 379 — 4、椒<sup>シウ</sup>：東 228 — 1・西 348 — 3、樵<sup>シウ</sup>：地 86 — 6・  
 西 318 — 6・西 333 — 1、宵<sup>シウ</sup>：地 151 — 2・東 226 — 6・西 308 — 2  
 ・西 344 — 6、矯<sup>シウ</sup>：南 456 — 6、趙<sup>シウ</sup>：地 145 — 3・地 147 — 5・西  
 366 — 2、表<sup>シウ</sup>：天 17 — 2、要<sup>シウ</sup>：天 9 — 5、曜<sup>シウ</sup>：北 567 — 5、詔<sup>シウ</sup>  
 ：西 353 — 1・南 411 — 4・南 435 — 2 など。

なお、原則的には「iヨウ」が期待される、蒸韻字「陵」  
 「氷」について、それぞれ「レウ」とした例が図書寮本文  
 鏡秘府論の墨点に、「ヘウ」とした例が長承本蒙求（一一三  
 四年）にすでに見られるが、六地藏寺本文鏡秘府論では、  
 ：天 49 — 6・地 102 — 3・西 353 — 1・北 572 — 5、氷<sup>リョウ</sup>：南 465 —  
 2と「iヨウ」形になっていることも注目される。ただ、  
 蒸韻字がどちらの語形を取るかに關しては、韻だけでなく  
 声母と開合も關わってくることも想定されており③、単  
 純にiヨウとeウの混乱として処理できない面もある。

### 二—三 合拗音の存在

まず、カ行合拗音に關してであるが、通説によると、「ク  
 ワ」が遅くまで保存されたのに対し、「クキ」「クエ」は鎌  
 倉時代後半には消滅したとされ、また「クキ」の方が「ク  
 エ」よりも早くに直音化した可能性が指摘されている④。  
 しかし、六地藏寺本文鏡秘府論では、一六世紀という書写

年代にも關わらず、月本（一九八四）でも述べられている  
 ように、「クワ」「クキ」「クエ」といった形をよく保存して  
 いることが注目される。以下、順番に見てゆく。

#### ①ア列

ほぼ原則通りの「クワ」を保っている（六九字一五九例⑤）  
 が、「カク」になっている例として、霍<sup>カク</sup>：南 482 — 5、漈<sup>カク</sup>：北  
 573 — 2の二例があり、このうち「漈」は図書寮本でも「カ  
 ン」表記になっている。合拗音消滅の早い例とも考えられ  
 るが、「幹（開音）」に引きずられた可能性も存する。

一方、カ行合拗音の表記に關しても、特色が見られる。  
 すなわち、図書寮本では「クワ」などの仮名表記に統一さ  
 れているのに対し、六地藏寺本では、「火（クワ）」を使っ  
 た類音字表記が、魁<sup>クイ</sup>：南 433 — 6・北 527 — 2、灰<sup>クイ</sup>：天 38 — 6、  
 隗<sup>クイ</sup>：西 280 — 6、嶮<sup>クイ</sup>：天 60 — 1、潢<sup>クイ</sup>：南 474 — 4、画<sup>クイ</sup>：西 251 —  
 6、驪<sup>クイ</sup>：東 222 — 1、活<sup>クイ</sup>：地 171 — 3、豁<sup>クイ</sup>：南 492 — 5、関<sup>クイ</sup>：東  
 239 — 5、煥<sup>クイ</sup>：天 57 — 5・西 251 — 6の一字一三例に見られ  
 る。カ行合拗音の表記法は、時代を追うごとに「火」「鬼」  
 などの類音字表記が少なくなり、仮名による表記が多くな  
 っていくことが指摘されているが（小林芳規（一九八〇）  
 など）、ここでの六地藏寺本の表記法は図書寮本より古い形  
 を反映していると言えそうである。

②イ列

カ行合拗音の中では早い時期に消滅したとされるが、六地蔵寺本文鏡秘府論では、危<sup>クキ</sup>：地161—3・西316—2・南413—2、揮<sup>クキ</sup>：南482—5、訓<sup>クキ</sup>：地132—2・南411—2・北556—6、篋<sup>クキ</sup>：南419—3、兎<sup>クキ</sup>：東189—4、恭<sup>クキ</sup>：西362—5などの三五字六三例(6)が「クキ」を保存している。一方、「キ」になつてゐる例は、季<sup>キ</sup>：天51—5・西363—1・西364—4、規<sup>キ</sup>：地112—1・地120—4・地120—6・西258—3・西359—4・南401—5・南412—3・南438—1・北584—3、胸<sup>キ</sup>：天53—5、局<sup>キ</sup>：地167—5、曲<sup>キ</sup>：天46—4・天56—1・地113—4・地115—4、項<sup>キ</sup>：北529—4・北547—1の六字二〇例である。このうち、「季」「規」は韻鏡四等字であり、当初から「キ」形で受容されたと考えられる一群である。一方、「胸」「局」「曲」については、他の箇所では胸<sup>クキョウ</sup>：天49—3・天56—2・北574—4、局<sup>クキョウ</sup>：天70—5、曲<sup>クキョウ</sup>：天49—3となつてゐるなど、揺れが見られる(6)。

なお、カ行合拗音という趣旨からは外れるが、麤<sup>クキ</sup>：西352—1・南482—3・南492—3、椎<sup>クキ</sup>：北540—2、誅<sup>クキ</sup>：西261—6といった、止撮合口字の「uキ」表記が見られることも付記しておく。従来、止撮合口字の「uキ」表記については、韻鏡から演繹された語形であるとされてきたが、近年の研究により、院政期以降、原音の合口性を保持する目的によるものと考えられる「uキ」の実例が散見されることが明

らかになつてきており、沼本克明(一九八六)で「uキ」表記の存在が指摘されているほか、佐々木勇(二〇〇四)では、豊富な実例とともにその存在が論証されている。六地蔵寺本には、麗<sup>クキ</sup>：南486—3、遣<sup>クキ</sup>：西333—1のような例も見られるため、速断は避けなければならないが、「麤」を「シキ」とした例がすでに図書寮本に見られるほか、「誅」「椎」を「uキ」とした実例についても、前述佐々木氏論文で挙げられていることから、これらが祖本の段階から存在した可能性も十分想定できるところである。

③エ列

原則通り「クエ」形になつてゐるのは、勸<sup>クエ</sup>：北525—3、権<sup>クエ</sup>：南458—4、元<sup>クエ</sup>：天28—3・南388—3・北542—5、原<sup>クエ</sup>：西348—1、阮<sup>クエ</sup>：天26—3・地155—3・西273—1・西294—4・西295—2・南402—4・南415—4・北584—6、蕙<sup>クエ</sup>：地81—1、睨<sup>クエ</sup>：北578—5などの一三字二八例(6)である。一方、「ケ」形になつてゐるのは、傾<sup>クエ</sup>：天40—1・東189—1・南419—3・北553—5、珪<sup>クエ</sup>：北538—2・北539—6・北581—1・北581—4・北588—4、桂<sup>クエ</sup>：地93—2・地98—6・地157—2・東231—3、螢<sup>クエ</sup>：地154—2、犬<sup>クエ</sup>：北569—1・北574—6、奎<sup>クエ</sup>：西251—6、娟<sup>クエ</sup>：東198—5・北504—6、瓊<sup>クエ</sup>：地172—2・地172—6・地173—3・地160—1・南490—6、闐<sup>クエ</sup>：天40—5・地152—3・地157—6、榮<sup>クエ</sup>：天38—6、榮<sup>クエ</sup>：南492—6・北563

—3・北568—4の一字三一例である。しかし、これらは全て四等字であり、当初から「ケ」形で受容されたものと判断できる。

一方、サ行合拗音、すなわち臻撰合口舌齒音字についても、「スキン」「シキチ」などの形が出現し、合口性がよく保たれている。また、例えば「述」には述<sup>スキチ</sup>：地131—6（<sup>10</sup>）・東204—6・南432—6・南454—5、述<sup>シキチ</sup>：北570—6というように「スキチ」「シキチ」の両形が、「潤」にも潤<sup>シキチ</sup>：南468—2、潤<sup>スキチ</sup>：南431—3・南471—5・南483—5・南494—2・北560—5と「シキン」「スキン」の二通りの表記がそれぞれ使われているなど、表記が確立していない状況も読み取ることができる。その一方で、「順」と「俊」については、順<sup>シキチ</sup>：西252—6・順<sup>スキチ</sup>：南446—4、俊<sup>シキチ</sup>：天55—2・俊<sup>スキチ</sup>：北552—1というように、それぞれ「シユン」と「スキン」の直拗両形が現れているなど、合口性が消滅する過渡期の状態を反映していると考えられる。

また、図書寮本では「シユツ」表記になっており、開拗音化している「蟬」が、六地藏寺本では蟬<sup>スキチ</sup>：西334—6と合拗音表記を保っているのが注目される。六地藏寺本で「火」表記が見られたのと同様に、六地藏寺本に古い語形が残っている場合があることが指摘できる。もともと、図書寮本で「シキン」「スキン」表記になっている「唇」が、六地藏寺本では唇<sup>シキチ</sup>：天50—6・西278—1と「シン」表記になって

いるなど、逆の場合も存することも付記しておく。合口性が失われる過渡期の姿を反映しているか、あるいは一六世紀の音形が偶発的に混じった可能性が考えられるところである。

## 二一四 影母・喻母の仮名遣

日本漢音において、影母と喻母がア・ヤ・ワ行のいずれを取るかは、等位と開合により決まるとされる（<sup>11</sup>）。時代を経るにつれて、日本語で発生した音韻変化の影響を受け、一部に混同が生じたが、六地藏寺本文鏡秘府論においては、イとキ、エとエ、オとヲが合流していた時代に書写されているにも関わらず、ある程度正確に書き分けられていることが分かる。以下、開口・合口それぞれについて、イ列・エ列・オ列に場合分けして論述する。

### ① 開口

・イ列

「イ」形を取っている場合が圧倒的に多く、郁<sup>イ</sup>：天6—1・天57—5・北579—3・北583—1、融<sup>イ</sup>：天54—3・西284—1、移<sup>イ</sup>：地153—3・西360—1、易<sup>イ</sup>：南377—6、乙<sup>イ</sup>：北532—2、寅<sup>イ</sup>：南458—3、熠<sup>イ</sup>：地145—6・地155—4・西334—6など、四一字一一三例にのぼる。一方、「キ」形を取っ

ているのは、「甕」<sup>オウ</sup>：天 57—5・地 15—2、応<sup>オウ</sup>：天 48—3・西 284—4、鷹<sup>オウ</sup>：地 163—3、颯<sup>オウ</sup>：地 177—6、颯<sup>オウ</sup>：東 218—4、汨<sup>オウ</sup>：地 170—1・南 474—5 の五字九例に過ぎない。

このうち、「応」「鷹」「颯」に関しては、図書寮本文鏡秘府論や長承本蒙求などでも「キヨウ」形が出現するため、日本漢音として「キヨウ」が許容されていたとも考えられるところである。後掲するところであるが、「甕」の仮名として「キヨウ」のほかに「ヲウ」「オウ」が出現しており、また「甕」の仮名がつけられている。図書寮本文鏡秘府論で「ヲウ」の仮名がつけられている。図書寮本文鏡秘府論では、「甕」は「オウ」、「翁」は「ヲウ（墨）」となっていることから、これらの字に関しては、表記に揺れがあったことが想定されるところであり、開合と音形とを単純に結びつけることは早計であるかもしれない。

残る「颯」「汨」については未勘である。あるいは「日（合音）」からの類推によるものかとも考えられる。

#### ・エ列

イ列の場合と同様、「エ」形が多く、四五字一三一例に上る。颯<sup>エ</sup>：地 167—3・西 282—6・南 493—1、謁<sup>エ</sup>：北 576—3、衍<sup>エ</sup>：天 66—2・北 563—4、筵<sup>エ</sup>：地 160—5、揺<sup>エ</sup>：天 44—3・東 210—1、要<sup>エ</sup>：天 9—5 などである。一方、「エ」形になっているものも、陶<sup>エ</sup>：北 556—1、耀<sup>エ</sup>：南 434—1、易<sup>エ</sup>：北 511

—2 の三字三例が存する。これらの例については、日本漢音の語形として合理的に解釈できた「応」などの例とは事情が異なるようである。まず、「耀」については、挙例した「エウ」形のほかに「エウ」形が西 265—3 に出現しているのに加え、図書寮本では「陶」「耀」「易（二例）」と「エウ」「エキ」形になっている。一—三で述べたように、六地藏寺本においては、字形の類似性に起因すると思われる「エ」と「エ」との誤認例がまま見受けられる。ここでの「エウ」「エキ」も、その一端であろう。

#### ・オ列

「オ」形を取っているのは、甕<sup>オウ</sup>：北 590—2、鳥<sup>オウ</sup>：北 545—5 の二字二例で、「ヲ」は翁<sup>オウ</sup>：地 158—5、甕<sup>オウ</sup>：北 581—6、蕪<sup>オウ</sup>：西 329—4、鳴<sup>オウ</sup>：地 153—1、鳥<sup>オウ</sup>：地 152—4・東 245—3、鄔<sup>オウ</sup>：地 84—2、恩<sup>オウ</sup>：西 368—3 の七字八例である。「甕」「翁」「蕪」については前述したところであるが、残りの「鳥」「鳴」「鄔」と「恩」については、前三者が模韻字、後者が痕韻字であることが注目される。注十一掲載沼本氏論考によると、両者は開口字ながらワ行で写された形跡のある一群であり、ここでの「ヲ」「ラン」もその傾向に沿っていると言えようであるが、「鳥」については「オウ」形も認められるなど、問題は錯綜している。

②合口

・イ列

原則通り、「ヰ」になつてゐるのは、雍<sup>オウ</sup>：北 506—4・北 552—3、邕<sup>オウ</sup>：地 89—2・北 567—2、委<sup>オウ</sup>：南 471—2・北 546—3・北 576—5・北 588—2、帷<sup>オウ</sup>：地 147—2・地 164—3・南 402—5、允<sup>オウ</sup>：北 530—4、韻<sup>オウ</sup>：南 491—4、詠<sup>オウ</sup>：南 397—3、城<sup>オウ</sup>：西 340—6、<sup>イ</sup>：北 544—3・北 564—1・北 572—2・北 573—3など、二四字五七例<sup>イ</sup>。一方、「イ」とした例として、用<sup>イ</sup>：南 393—5が見られる。「用」は喻母四等字であるため、「イ」形も首肯できるのであるが、用<sup>イ</sup>：西 288—5・西 348—3と「ヨウ」形も認められるほか<sup>イ</sup>、「イヨウ」という語形自体が珍しいものであるため、今後さらに用例を集める必要がある。

・エ列

「エ」は、穢<sup>エ</sup>：天 9—6・南 447—6、宛<sup>エ</sup>：天 19—3・南 462—2・北 588—2、越<sup>エ</sup>：地 153—2・西 354—4・西 369—5、鉞<sup>エ</sup>：北 565—4、園<sup>エ</sup>：天 25—2・東 197—5・西 348—4・西 355—1、榮<sup>エ</sup>：天 37—2・天 44—3・地 138—6・西 261—5・西 324—1・南 487—4・北 548—2・北 579—6・北 589—5、役<sup>エ</sup>：北 528—6などの二三字五四例。一方、「エ」は、怨<sup>エ</sup>：地 146—2・地 147—3、澗<sup>エ</sup>：天 56—2・地 98—3・地 146—3・東 246—4・南 433—3・南 479—4・北 537—5・北 564—2、轅<sup>エ</sup>：

・オ列

「オ」は温<sup>オ</sup>：南 416—3の一例、「ヲ」は温<sup>オ</sup>：西 364—1・南 483—5、温<sup>オ</sup>：北 565—5の二字三例が存する。「温」に「オン」「ラン」の両方が出現する現象は、長承本蒙求にすでに見られ、漢字音におけるオ・ヲの混同例と考えられるところである。

二一五 iウとiユウ

本来の日本漢音では、「シユウ」が稀に見られるのを除いて「iユウ」形は存在せず、全て「iウ」形だったとされる<sup>イ</sup>。本資料には、崇<sup>シユウ</sup>：東 228—3、融<sup>シユウ</sup>：西 253—2・南

北 501—6、營<sup>オウ</sup>：地 101—4・地 112—4・西 280—6、睿<sup>オウ</sup>：北 530—4、榮<sup>オウ</sup>：地 130—1・東 219—4・北 537—4、穎<sup>オウ</sup>：天 60—1・北 592—4、役<sup>オウ</sup>：東 245—3の八字二一例である。このうち、「澗」「睿」「營」「穎」「役」の五字は四等字であり、当初から「エ」形で日本漢音に受け入れられたと考えられる一群であるが、「怨」「轅」「榮」に関しては、既述してきたように、字形が類似していることによる誤認の蓋然性が高いと考えられる。ただ、合口四等字の中にはワ行で受け入れられた可能性のあるものも存することは、注11沼本氏論考でも述べられているところである。

417—3の二字三例の「シユウ」「ユウ」形が現れるが、このうち「崇」については、崇<sup>まへ</sup>：地140—6と「スウ」の例も認められ、表記が揺れている状況を示している。「融」については、図書寮本での「融」が「イウ（墨）」となつているところから、後世の語形とも疑われるところであるが、iウ↓iユウの変化は、「イウ↓ユウ」が他の「キウ」「チウ」などに先行したということは前掲沼本（一九八六）で述べられており、祖本の段階でも「ユウ」だった可能性は存する。

以上の検討から判明したことは、六地藏寺本の漢音は、一六世紀前半という書写年代にも関わらず、伝統的な日本漢音の体系に相当程度合致しているということであり、所々ではむしろ図書寮本よりも古い姿を反映していると思われる用例も存する点が注目される。第一節で見たように、六地藏寺本文鏡秘府論は、鎌倉時代中期以前の本を、機械的に書写したと考えられる資料であり、そのため字音点に関しても古い姿をとどめているものと考えられる。

### 三 声点の検討

六地藏寺本文鏡秘府論では、おびただしい量の声点が差されておき、筆者の調査によると「天」巻だけで二二六五例に及ぶ。図書寮本全体でも約九〇〇個しか存しない（柏谷（一九六五a）所載の表による）ことを考え合わせると、

その量の多さが知られるのである。このように六地藏寺本の声点は量が膨大である上に、巻による字音声点の差異というものも特段見られないことから、ここでは「天」巻の声点について、検討を加える。

まず六地藏寺本での声点は、平声・上声・去声・入声に加え、平声・入声に軽重を区別した六声体系であるように見えるのだが、実際には軽重の認定が困難である用例が多いことに気づく。また、一方では、同じ字であっても分布にばらつきがあるという特徴があり、若干の例を挙げると、天巻に出現する「声（全清音）」の場合、平声（重）：三五例に対し平声軽：一九例。「天（次清音）」だと、平声：九例、平声軽：二例。「音（全清音）」だと、平声：一一例、平声軽：六例。「軽（次清音）」は平声・平声軽が四例ずつ、などであり、六地藏寺本の書写者に軽重を峻別する意識があったわけではないと考えられる。

平声の軽重は一四世紀初頭までに、入声の軽重は一二世紀中頃には混同を起こし、やがて軽重の区別をしない「四声体系」に変化したとされる（柏谷（一九六五a）など）。図書寮本文鏡秘府論では、入声の軽重については混乱が生じていた反面、平声に関してはまだ区別が保たれているのだが、六地藏寺本では完全に区別がなくなっており、ただ祖本が六声体系であったであろうことを窺わせるにすぎなくなっている。

以上のことから、六地藏寺本の声点は事実上「四声体系」ということになるのだが、このことを踏まえて天巻についての声点と中古音との対応表を作成すると、下の「別表」のようになる。典型的には太線の中に分布するはずであり、この表でも太線内に大部分の用例が集中しているのだが、ここで注目されるのは、「上声全濁字」の分布である。

日本漢音では、唐代の中国語で発生した「上声全濁字の去声化」を反映している場合があり、その度合いは資料により差が見られること、文鏡秘府論は上声全濁字の去声化が進んだ資料であること、などが沼本克明（一九八二）本論第二章第五章により指摘されているが<sup>(15)</sup>、しかし、六地藏寺本においては上声と去声とが拮抗しており、明らかに他本とは異なつた傾向が現れている点が目玉される<sup>(16)</sup>。これまで見てきたように、六地藏寺本の書写に当たつては、新たに訓を加えるようなことはなく、多分に祖本を踏襲している傾向があつた。そのため、声点についても、祖本の段階からこのような特徴を帯びていたと判断される<sup>(17)</sup>ところである<sup>(18)</sup>。

それでは、なぜ文鏡秘府論各本の傾向に反し、六地藏寺本とその祖本で上声全濁字の去声化があまり進んでいないのか、という問題が生ずるわけであるが、この問題を解決するためには、当時の漢語声調のあり方や学統との関係など、より広範な考察が必要であり、六地藏寺本文鏡秘府論

別表：六地藏寺本文鏡秘府論・天巻の声点（四声）と中古音との対応関係

中古音 本資料	平声				上声				去声				入声			
	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁	全清	次清	全濁	清濁
平声	156	41	109	98	5		3	2	6	1	2	7				1
	429	90	245	253	5		3	3	7	1	2	7				1
上声	7	4	3	2	69	16	20	43	4	1	1	2	1		1	
	9	4	3	2	171	35	41	106	4	1	1	2	1		1	
去声	5	1	4	2	4	2	11	3	69	15	39	45			1	
	6	1	4	3	5	3	33	5	156	34	107	149			1	
入声				2	1							1	59	16	40	43
				2	1							1	127	30	72	88

上段が異なり字数、下段が延べ字数である。

の漢字音について記述するという本稿の趣旨からも逸脱し  
かねない。もとより、六地藏寺本の祖本の姿は完全には解  
明されておらず、祖本に近いと目される宝寿院本について  
も、ほとんど学界に知られていないのが現状である。その  
ため、ここでは「上声全濁字の去声化」が進んでいること  
は必ずしも『文鏡秘府論』全般に共通して見られる特徴で  
はない、ということを指摘するにとどめておき、子細な検  
討は将来の課題としたい。

#### 四 まとめ

以上の考察で得られた結果を箇条書きにすると、次のよ  
うになる。

- ① 六地藏寺本の仮名音注は、鎌倉時代中期以前の姿をよく  
とどめており、所々に凶書寮本より古い音形が認められる。  
そのため、六地藏寺本自体は一六世紀の書写であるが、日  
本漢音資料として有用であると考えられる。
- ② ただし、無反省・無批判に書写したと見受けられる点がある。  
仮名字体の誤認が多数存するほか、祖本の段階では存在  
したと考えられる平声・入声の軽重の区別が捨象されて  
いるなど、研究資料として扱うに当たっては十二分の注  
意が必要である。
- ③ 上声全濁字の去声化の割合が低くなっている。これは、

他の文鏡秘府論写本には見られない傾向である。

本文中でたびたび述べてきたように、六地藏寺本文鏡秘  
府論の最大の特徴は、他本を圧倒する字音点が加えられて  
いるということである。他日、字音点分韻表などの基礎的  
資料を公開し、学会の便宜に供することを企図している。

#### (付記)

本稿は、平成一八年四月に行われた、東京大学国語国  
学会での研究発表の内容を改稿したものである。席上、数  
多くの有益な御指摘・御教示を頂いた。この場をお借りし、  
衷心より御礼申し上げる次第である。また、後日、佐々木  
勇先生より止撰合口字表記について御教授を賜った。併せ  
て深謝申し上げる。なお、本稿は平成一八年度科学研究費  
補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

#### [注]

- (1) 訓点資料の年代による返点の差異や変遷などについては、小  
林芳規(一九七四)参照。
- (2) 以下、本稿ではア段音全般を「a」で表記することとし、「i」  
「u」「e」「o」についても同様とする。
- (3) このあたりの事情については、平山久雄(一九六七)など参  
照。
- (4) 沼本克明(一九八六)による。

(5) この数字には、<sup>クハシ</sup>緩<sup>ハシ</sup>…西274—3、<sup>クハシ</sup>閑…南393—3、<sup>クハ</sup>跨…天55—6のような「クハシ」の例も含む。

(6) <sup>クキキ</sup>屈…南425—6 (割注内) の例も含む。「チ」を「キ」と誤認したものと判断した。

(7) 唇・牙・喉音四等字は、強い口蓋性により、当初から「開音」として日本漢字音に受容されたものと考えられている。有坂秀世(一九五七) など参照。

(8) イ列合拗音の消滅に関しては、「クキヨウ」「クキヨク」のような長い語形のものから合口性が失われた可能性が、佐々木勇(二〇〇三) で指摘されているが、本資料でもその傾向に沿っていると言うことができる。

(9) <sup>クエツ</sup>穴…北572—3、<sup>クモシ</sup>縷…地151—2の「クエ」形も含む。また、<sup>イユチ</sup>缺…地152—1に関しても、「ク」を「イ」と誤認したものと考え、合拗音例の中にも含めた。

(10) 「スキテ」となっているが、祖本の「チ」を「テ」と誤認したものと判断した。

(11) 沼本克明(一九八二) 本論第二章第四節など。

(12) この例は「キヨク」の仮名が付されているが、「キ」を「キ」と誤認した例と判断し、「キヨク」の例として処理した。

(13) なお、この中には、<sup>クハシ</sup>喩母合口四等字も含まれている。前掲沼本氏論考によると、<sup>クハシ</sup>喩母合口四等字は基本的にヤ行で現れるとされる一群であるが、<sup>クハシ</sup>脂韻・<sup>クハシ</sup>諄韻についてはワ行が出現するとされる。

本資料で出現する<sup>クハシ</sup>喩母合口四等字は、その<sup>クハシ</sup>脂韻(「帷」「位」「惟」「維」

「遺」・<sup>クハシ</sup>諄韻(「允」) 字のみであり、ここでの「キ」は原則に沿っていると言うことができる。

(14) なお、「iヨ」と「ヨ」の両形が出現する例として、「城」も挙げられる。本文中で挙例した「キヨク」のほかに、<sup>ヨク</sup>域…西267—2として例がある。

(15) 沼本克明(一九八六)、肥爪周二(二〇〇二) など参照。

(16) 沼本氏の分析結果は、<sup>クハシ</sup>図書寮本のほか高山寺甲本・長寛頃点(天巻)、<sup>クハシ</sup>成賞堂文庫本鎌倉頃点(地巻)の三種類の本の考察から導き出されたものであり、実際、この三種類の本について見ると、上声全濁字の大部分が去声化している様が見て取れる。

(17) 「反切などの学習の介入(沼本克明(一九九七) 第一部第三章) や、「日本語の影響による、一音節上昇調や熟語単位の中低型の回避(佐々木勇(一九八八))」などの原因により、上声全濁字の声点(従来「去声点」から韻書通りの「上声点」へと変化した場合があったことが、従来指摘されている。しかし六地藏寺本の場合、これらに原因を求めると考えられる。

(18) 六地藏寺本とかなり近い関係にあると目される宝寿院本について、小西基一(一九四八) は、「全体にわたって綿密な声点を差してある(七四ページ)」としている。宝寿院本が六地藏寺本の祖本そのものであるという保証はないが、六地藏寺本の声点の由来を考える上で、留意すべき指摘と思われる。

引用文献

- 有坂秀世(一九五七)「唇牙喉音に於ける合口性の弱化傾向について」  
『国語音韻史の研究』三省堂
- 柏谷嘉弘(一九六五a)「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」『国語学』  
六一)
- (一九六五b)「図書寮本文鏡秘府論字音点」『訓点語と訓  
点資料』三〇)
- 小西甚一(一九四八・五一・五三)『文鏡秘府論考 研究篇上・下、  
攷文篇』(大八洲出版、大日本雄弁会講談社)
- 小林芳規(一九七四)「返点の沿革」『訓点語と訓点資料』五四)
- (一九八〇)「訓点における拗音表記の沿革」『論集日本語  
研究13・中世語』有精堂出版)
- 佐々木勇(一九八八)「日本漢音に於ける声調変化——岩崎文庫本『蒙  
求』を中心に——」『新大國語』一四)
- (二〇〇三)『大慈恩寺三藏法師伝』鎌倉初期点における  
漢音形の日本語化——院政期点および『蒙求』字音点との比較を通  
して見る——『新大國語』二一九)
- (二〇〇四)「日本漢音における止摂合口字音の受容に見ら  
れる位相差」『国語国文』七三—七)
- 月本雅幸(一九八〇)「高山寺藏文鏡秘府論長寛点」『高山寺典籍文  
書の研究』東京大学出版会)
- (一九八四)「六地藏寺善本叢刊第七卷『文鏡秘府論』・解  
題」(汲古書院)
- 沼本克明(一九八二)『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』  
(武蔵野書院)
- (一九八六)『日本漢字音の歴史』(東京堂出版)
- (一九九七)『日本漢字音の歴史的的研究』(汲古書院)
- 肥爪周二(二〇〇一)「ウ列開拗音の沿革」『訓点語と訓点資料』一  
〇七)
- 平山久雄(一九六七)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書1・言語』  
大修館書店)
- (いしやま ゆうじ) 大学院人文社会系研究科博士課程三  
年・日本学術振興会特別研究員DC)